

城北中学を追想する

小島 宣夫

昭和十六年開校の城北中学は、開学当初は、市ヶ谷佐内坂の上に仮校舎があった。公立中学の受験に失敗した私は、捲土重来の意気込みで志願したところ無事合格した。集まった同級生たちは、この学校の恵まれた教育環境にすぐ溶け込んだ。新設中学のため、近藤薫明校長は学生指導に気合がこもっていた。国語の村野、英語の難波先生など、今でも思い出す。学生たちも大半が公立校に失敗しての捲土重来の意気込みで、授業に取り組んだ。仲間意識も固く、同期生の親睦の集まり「城北一期の会」は今でも年に三回開かれていて、たのしく談笑している。

けれども一年制後半、十二月八日に真珠湾の攻撃で日米戦争が始まって情勢は一変した。最初はシンガポールを攻略し、ジャワ、ビルマと快調に侵攻が進むが、体制を整えなおしたアメリカの空軍が出撃し猛反撃を始めると、日本は敗戦に次ぐ敗戦で太平洋から追い落とされ、ついにサイパン島が陥落した。

サイパンからは米空軍機が日本に來襲できる距離だ。当時学校の授業は無くなり、生徒は毎日、凸版印刷の板橋工場で勤労動員に従事していた。私はもう学校にいる時ではない、男子たるもの戦闘に参加して国防に身をささげる時だ。しかし一兵卒ではつまらない。将校になってお役に立ちたいと思い、陸士を志願したが、近眼は受験できない。経理学校ならば近眼OKということなので受験し、合格した。四年生の十一月に入校したので、城北は卒業できなかつたが、戦後、卒業が認められた。

以上が僕の城北時代だ。